

・小学校入学の時、ショートカットだった私を見て、隣の女の子は、すごく真面目な顔で「あんた男?それとも女?」って聞きました。白樺台 M・N

大樂毛物語

(1)



写真/釧路湿原

本州などからきた人たちに「大樂毛」の地名を見せて、「何と読むかかる?」と問いかけると、決まって我こそは言い当てるやうと近寄つてきて、「ウーン」と考え込む。「だいらつけ」と大きな声。続いて「だいらくもう」「……」。ちらりにすれば、謎かけに引かかって、満足な答えが出て、ない優越感に一瞬漫る時である。

「大樂毛」は、北海道の地名に多少心得がないと決して読めない地名の一つだが、これほど「原語」に近い当て字はないのだそうだ。アイヌ語で「オタノシケ」は O-ta - N o s h i k e 、「砂浜の中央」という意味だという。釧路から西に向かって白糖まで続く見事なまでの「砂浜」は、車窓からも伺い知るところ。大農家の次・三男たちには、

ここを歩いたことだろう。ゆるくカーブしつつ広がる大地。アクセントといえば「大樂毛川」が流れているだけの、まさに平凡な平坦地である。

「秋になると、シシモの大群があがつてさ、警察の目を盗んでよくとつたよな」と、少年時代の「悪さ」を得意気に話すのは、もう年老いた○○さん。満足な食生活でなかつた終戦後、天はこの地域の人たちに自然の恵みを与えた。警察だつて見て見ぬふりをしなければならなかつた、貧しい時代の話である。

釧路がまだ「クスリ」と呼ばれていた時代、住んでいたのはアイヌの人たちだ。17世紀の中頃、250年も前にその記録がある。日本の北辺を脅かすロシアの南下政策は、幕府の頭を痛めていたところ。明治となり、仕事を失つた「サムライ」や農家の次・三男たちには、

だ。「えぞ地」から「北海道」に変わったばかりの未開の地は、彼らの目指すところでもあつた。

「北海道に行つて、旗あげてくんべエー」。

「そんな簡単にいくべか」。

不安がなかつたといえばうそだ。しかし「ここにいたつてどうしようもねエーベヤ」。

中村英重著の「北海道移住の軌跡」(高志書院)を読むと北海毎日新聞(今のが北海道新聞)の記者2名が、北海道移住勧誘の「遊説日誌」をしたためている。これを読むと当時の移住する人々の苦悩の歴史がよくわかる。

中国から日本へ密入国させせる「蛇頭」ではないが、あくどい移民船のワナに引っかかり、途方にくれた移住民の記録もある。

釧路村から「町」に変わった翌34年に釧路・白糖人口1万人、2000戸。

釧路村から「町」に変わった翌34年に釧路・白糖間に、道東で初めて鉄道が走つた。歩くか馬車でなければ通じなかつた大樂毛に、文明の足がつながつた。すでに集落を形成していたオタノシケで

はいい方だが、農業を目指して入植した人々は、かなしい。「いつたい、ここに何が育つんじや」と、着くなりへたり込む老人の姿があつた。夏短く、日も弱い。ヨシやスゲ類におおわれハンノキの林の合間に、降つたばかりのたまり水があちこちに広がる原野に見る目をうたがつた。「くそつ!おれたちはだまされたんだ」と、地たんだを踏む若者の中で、じつと草原を見つめる大人たちがいた。外国船が出入りするようになつた明治33年(1900年)、釧路の人口1万人、2000戸。

釧路村から「町」に変わった翌34年に釧路・白糖間に、道東で初めて鉄道が走つた。歩くか馬車でなければ通じなかつた大樂毛に、文明の足がつながつた。すでに集落を形成していたオタノシケで

(つづく)

購読お申し込みは

フリーダイヤル ヨムヨ・ドーシン

0120-464-104

または右記販売所へ

(有)丹葉新聞店

釧路市大樂毛5丁目8の1

TEL:57-8228

北海道新聞